
逃亡者

martini

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逃亡者

【Nコード】

N1245F

【作者名】

martini

【あらすじ】

深夜。組織のアジトが騒がしくなる。組織の裏切り者として、地下のガス室に閉じ込めておいた男が、逃亡したのだ。発見したのは見張りの男。やけに静かだと思い、中を見ると、もぬけの殻だったのだという。その組織の裏切り者とは、いったい誰か？なぜ、組織を裏切ったのか？その答えは、この話にある！

FILEO 組織を裏切った男

それは、深夜。人々が眠っているところに始まった。

「いない、いないぞ！逃げやがった！急いで上に伝えろ！！」

一人の男の声が響く。

その男は、真つ黒な格好をしていた。

その瞬間、バタンツ！とドアを開ける音がした。

「何だと？！探せ！まだ遠くには行っていないかもしれない！」

また、一人の男の声が響く。

その男もやはり、真つ黒な格好だった。

「ハッ！」

男たちも、真つ黒だ。

「くそつ。あの野郎・・・組織を、裏切った」上に、逃亡か！上司
だったが、もう敬語を使う必要はないな・・・」

男は、静かに吐いた。

「はあ、はあ、はあ。これだけ逃げれば、流石に探すのにも時間もかかるだろう・・・」

組織の逃亡者、つまり、裏切り者と言われた男も、真っ黒な格好。

しかし、その男は、小さな子供だった。

外見、6、7才程度。

その男は、滅多に息を切らせたりはしない。しかし、子供だからだろつ。

息を切らせている。

「急がないと・・・捕まっちゃう・・・あいつらも・・・そろそろ来るか・・・」

男はそう言つと、町に向かって、また走り出した。

暗い暗い、暗闇の中を一人で・・・

FILEO 組織を裏切った男（後書き）

終わった・・・

短くすみません。

登場人物がはつきり小説に書けるようになったら、ここに、‘人生、何が起こるか分からない’のように、小話を書かせていただきます。

宜しくね〜w

FILE 2 記憶喪失の少年

「今日は何もなかったわね・・・」

「ああ、そうだな・・・」

男女が、夜の道を歩いていた。

女の名は、ジヨディ・スターリング。

男の名は、赤井秀一。

政府に極秘で、日本に潜入捜査をしている、FBI捜査官だ。

追っているのは、組織。

その中でも、追っているのは、暗号名^{コードネーム}、ベルモットだ。

「あら？あそこで誰かが倒れてるわ!」

「何があつたんだ？」

ジヨディと赤井が駆け寄る。

そこには、小学生ぐらいの男の子が倒れていた。

「じ、この子……ジンに似てる！」

ジン……この名前は、コードネーム暗号名だ。

その男も、ベルモットが入っている組織の仲間。

正確な地位は分からないが、リーダー格なのは確かだ。

身長は、180cmぐらいと、高い。

今の季節には、不似合いな黒のロングコートを身にまとっている。

帽子に隠しきれない長さの髪。色は金色。

少し、カールがかかっている。

これが、ジンの大体の特徴。

「ん？・・・！血を流してるぞ！たぶん、車にひかれたんだ！」

「ひき逃げね！とりあえず、病院に！」

ジヨディと赤井は、ジンによく似た男の子を、病院へ連れていった。

「もう大丈夫ですよ。頭を強打していたようですが、一命は取り留めていきます。意識が戻ったら、ナースコールを押ししてください。」

「分かりました。ありがとうございます。」

ジョディは、主治医の説明を受け、仁のいる病室へと向かった。

「シュウ？起きた？その子。」

ジヨデイが、病室に入るなり、赤井に聞く。

「いや、まだだ。」

「そう……」

ジヨデイが、少し肩を落としたその時。

「ん……」

「お、起きたのか？」

「こ、ここは・・・？」

子供特有というのだろうか？

少し、普通の男の子よりは高い声が、病室に響く。

「ナースコールを押しましょう。」

「ああ。」

赤井が、ナースコールを押した。

しばらくすると、主治医が入ってきた。

「意識が戻りましたね。じゃあ、質問するね。いいかな？」

「・・・うん。」

「君、お名前は……?」

「名前……?……ッ!」

急に、男の子が頭を抱えた。

「ど、どうしたんだい?!」

「痛い……」

「……!分かった、もういいよ。」

「……」

男の子が、頭から手を離した。

「どつやら、記憶喪失のようですね。名前を考えてあげたほうがいいでしょう。」

「あ、はい、分かりました。」

「それではお大事に。」

主治医は、病室から出ていった。

「じゃあ、名前を考えましょう。えっと・・・」

「名前なんて、つけたことないから分からない。降参。」

「早っ！もう！んじゃあ・・・白野^{しろの}仁^にで、どう？えっと、漢字で書くと、白い野原で、苗字。で、にんべんに、数字の二を組み合わせた字の、仁。で、どう？ちょっと説明、おかしいけど。」

「まあ、分かる。それでいいか？」

「クンとうなずく。」

「じゃあ、今度から白野仁ね！」

というところで、その男の子の名前は、白野仁となった。

「とりあえず、ブラリと町でも歩きましょう。」

「そうだな。一時退院をもらってくる。」

赤井は、病室から出ていった。

それから10分後。赤井が帰ってきた。

「いいらしい。とりあえず、行こう。」

「いっしょに。」

「……うん。」

そして、ジョディたちは、病室から出ていった。

FILE 2 記憶喪失の少年（後書き）

ジヨデイ「でも、驚いたわね。ジンによく似た男の子が、記憶喪失だなんて。」

赤井「見た瞬間、ジンかと思ったぞ。」

仁「……僕のこと、知ってるの……？」

ジヨデイ「え？い、いいえ。よく似た人がいたなって思ったのよ。とりあえず。次回も読んでくださいね。」

赤井「読むやつ、いるか……？」

仁「それって……言っちゃダメなんじゃないの……？」

FILE 3 仁の父親

ジヨディたちは、ブラリと町の中を歩いていた。

「楽しい?仁。」

「うん。」

「それはよかったわ。」

ジヨディも、楽しそうだ。

その時、一人の男に話しかけられた。

「じ、仁?!」

「え……?」

「仁!君、仁だね?!」

「え、えつと・・・」

「失礼ですが。」

赤井が止める。

「確かにこの子の名前は仁です。しかし、そんな名前の人、何人も
いはずです。あなたは、どうしてこの子を、仁だとお分かりなり
ましたか？」

「背格好や、外見が似ているからです。」

「写真はありませんか？」

「あります、あります。」

そう言って、男は写真を取り出した。

『じ、仁そっくり!』

その写真に写っていた子供は、仁そっくりだった。

「苗字は、白野です。」

「お、同じだわ！」

「やっぱりですか！やあ、よかった！搜索届を出すところでした！」

「え・・・？」

赤井たちは、声を洩らす。

「昨日から、仁が見当たらなかったのです。遊びに行くと言ったきりです。ですから、もう流石に遅いと思ひまして、今から、警察に行くところだったのです。」

「あ、あの、この子はあなたの子供ですか・・・？」

「はい。」

「じ、実はですね、この子、記憶喪失になっているらしいのです。」

「な、何ですと?!」

ビクッ!

仁の体が震えた。

「じ、怖い……」

「ああ、ごめんね。」

男は、やさしく謝る。

「分かりました。それで構いません。どうか、返していただけませんか?」

「……俺はいいと思っぞ。」

「私も。じゃあ、お返しします。じゃあね、仁。」

「うん。ありがとう、お姉さん、お兄さん。」

「最後にひとつ。」

「何でしょう?」

赤井が、男に言った。

男は、赤井の顔を見る。

「あなたの職業は?」

「私ですか?わたしは、業界のことですよ。白野財閥しやうのざいごうですから。」

「あっ!白野財閥って・・・あの鈴木財閥の右に並ぶ、財閥じゃない!」

「そうなのか?」

「はい。皆さまにはそう言われております。」

「へえ。」

赤井は、感嘆の声を洩らす。

「私の名は、しろの白野けんた健斗です。じゃあ行くう、仁。」

「うん。」

そして、健斗と仁は、去っていった。

「これでよかったのね。」

「ああ。」

赤井とジヨディは、しばしの間、仁達が歩いていった道を、ボンヤリ見ていた。

FILE 3 仁の父親（後書き）

ジヨデイ「これでよかったのよね・・・」

赤井「お前、さっきから何回言ってるんだ？」

ジヨデイ「だって・・・あつ、そうだね。お読みの皆さま。少し訂正があります。目次で、『FILE0』から、『FILE2』まで、飛んでいました。どうぞお許してください。」

赤井「作者も馬鹿だな。」

ジヨデイ「こら、そんなこと言わないの！読む人だっているんだから。」

赤井「まあ、ほとんどいないだろうな。」

作者「ひどいよ、赤井さん。」

赤井「事実だ。」

作者「ガン・・・でも、最後まで書くよ！」

ジヨデイ「ファイト！私、応援してるから！」

作者「はい！」

赤井「無駄だろうがな・・・」

作者・ジヨディ「それを言わない！」

赤井「はうい・・・」

FILE 4 仁の母親（前書き）

白野仁 しろのじん

夜中に、道で倒れていた男の子。小学1年生。

車にはねられ、記憶喪失になってしまっているらしいが、詳しい事は分かっていない。

名前を聞くと、痛いと言い出すため、白野仁、と名乗っている。

今のところ、仁は白野財閥のお坊ちゃんと言っことになっている。

だが、本当なのか、まだ分からない。

ジンによく似ていて、赤井とジョディは、一瞬、ジンが幼児化した
と思った。

詳しい事は、まだ分からずじまいだ。

FILE 4 仁の母親

仁は、屋敷みたいなところへ着いた。

「お、大きい・・・」

すごい広さだった。帝丹小学校の、運動場ぐらいの大きさだった。

「ここが、私たちの家だよ、仁。」

「え？あ、はい。ありがとうございます。」

にこつと仁は笑いかける。

まるで、天使のほほえみだ。

「じ、仁！あなた、仁が帰ってきましたの?!」

一人の女が、健斗に駆け寄る。

「ああ、やさしい方が、見つけてくださったのだよ。記憶喪失になっ
ているらしいのだが。」

「え．．．？そ、そうです。でも、生きて帰ってきてくれただけ
でも、嬉しいですね。仁、あたくしのこと、覚えていますか？」

女が、やさしく問いかける。

「．．．ごめんなさい、何も覚えてなくて．．．」

シユンとなった仁を、女はやさしく言う。

「いいですわ、そんなの。あたくしは、白野ユリと申しますわ。あ
たくしは、ハーフです。アメリカ人と、日本人の。あなたも、ハ
ーフですよ。」

「僕も．．．ハーフ？」

「ええ、そうです。あたくし同様ですわ。とりあえず、お部屋を
案内しますわ。あなた、皆にこのことをお伝えくださいな。」

「分かった。」

健斗は、タタタツと走っていった。

「えっと・・・僕、二人のこと、どう呼んでたのですか？」

「あたくし達のことですか？あなたは、あたくし達のことを、いろんな呼び方で呼んでいましたわ。どう呼んでも、構いませんわ。」

「えっと・・・じゃあ、お母様・・・ってダメですか？」

「そんなことございませんわ。あなたは大体、そう呼んでおりました。それに、敬語じゃなくても宜しいですわ。」

にこつとユリは仁に笑いかける。

「じゃあ、お母様は、いつもそのしゃべり方ですか？って敬語になっちゃってる・・・」

「ウフフッ。無理にしなくても宜しいですわ。そうですね・・・いつも、誰でもこの言い方ですね。皆さまがそう言つものですから、すっかりこの口調が、癖になってしまったようですね。」

「皆さまも、そんな言葉づかいなのですか？」

「ええ。男の方は敬語。女の方は、あたくしのような言葉遣いですわ。男の方は、自分のことを、‘私’と申しておりますわ。」

「そ、そうですね。ならば、僕も。」

「ウフフツ。あなたが、この年で敬語なのは、記憶喪失になってしまったからですね。でも、それも新しいあなたを見れて、嬉しいですわ。」

「へえ。お母様！お部屋を見せてください。」

「分かりましたわ。それでは参りましょう。」

仁とユリは、仲良く歩き出した。

「
ここが、
あなたの部屋ですわ。
」

「これが私の部屋ですか・・・広いですね。私は、こんなお部屋で生活をしていたのですか・・・すごいです。」

「少し、服をお探しになったほうが宜しいですわ。あたくしは、用事がございますので、着替え終えたら、さっきあたくしが紹介した、あたくしの部屋へと、来てください。」

「はい、分かりました、お母様。」

ユリは、にこっと笑うと、仁の部屋から出ていった。

クローゼットを開けると、100着近くの量の服があった。

「どれにしよ・・・あ、これいいな。黒、好きだし。あつ、でも・・・ここじゃ黒は似合わないかな・・・」

ガチャッ。

仁の部屋のドアが開いた。

「だ、誰？」

「しぎげんよう。」

「え？え、えっと、しぎげんよう？」

「しぎげんよう、は、会った時も、別れる時も、使える言葉ですわ。」

「へえ、そうですね。ってあなたは……？」

「わたくしは、ここの召し使いをしております、川島空美かわしま そらみと申しますわ。」

「空美様……ですか？」

「様付けだなんていりませんわ。わたくしは召し使いですもの。」

「でも、召し使いという身分にとらわれずに、平等で行きましょうよ。ダメですか？」

「い、いえ！そんな事はありませんわ。とっても嬉しいですわ。」

空美は、あわてて言う。

「空美様。ぼく・・・じゃなくて私、黒い服が好きなんです。でも、このお屋敷に、黒は似合いませんよね・・・？」

「いいえ、そんなことはございません。この屋敷では、黒い服を着ている方のほうが、多いのです。ですから、黒のほうが、お似合いかと・・・」

「本当ですか、空美様！よかったです。あの、できればもう少し黒を多くしていただきたいのですが・・・今度、多くしておいてくださいませんか？」

「かしこまりました。」

「ありがとうございます、空美様。」

にこっと天使のほほえみを空美に見せる。

「しきげんよう、空美様。」

「ごきげんよう、仁様。」

そして、二人は別れた。

仁は、選んだ服を着ると、ユリの部屋へと向かった。

「お母様！この服、いかがですか？」

「まあ！きれいな服ですわね、仁。今日は、鈴木財閥と一緒に、パーティーを行いますわ。この服で行きになられて。」

「はい！」

「元気ですこと。学校は、帝丹小学校でよろしいのですか？」

「はい。どいでもよろしいです、お母様。」

「もう、父が手続きしてますわ。さあ、支度をしますわよ。」

「はい！お母様。」

仁は、ユリの歩く後ろを、歩いていった。

そのパーティーで、思いもよらぬことが起こるとも知らずに……

FILE 4 仁の母親（後書き）

仁「次はパーティーですね。楽しみです。」

ユリ「おとなしくしてくださいね、仁。」

仁「はい。」

健斗「だが、何か起きそうですね。」

仁「あまり不吉なことを言わないほうが、身のためですよ、お父様？（絶対零度の微笑み）」

健斗「そ、そうですね・・・」

ユリ「次回もぜひ。」

仁「読んでください（天使の微笑み）」

FILE 5 パーティーでの事件

「ここが、パーティー会場ですわ、仁。」

「・・・ひっろーい・・・」

仁達は今、パーティー会場に来ていた。

しかし、そのあまりの広さに、仁は言葉が出ない。

「ん？」

仁は、どこからか視線を感じた。

キョロキョロとあたりを見渡すと、その視線も同時に消えた。

「仁、迷子になりますわよ。」

「あっ、はい！」

仁はとりあえず、ユリについていった。

しかし……

「どづしましよう……迷子になっちゃいました……」

仁は完全に迷子になってしまった。

ユリとはさほど離れてはいなかったのだが、人込みのせいで、前が見えなくなり、ユリを見失ったのだ。

その時、声をかけられた。

「あの、いいかな？」

「へっ？」

仁は、急に声をかけられたため、変な声を出してしまった。

「君、お名前なんて言うの？僕、江戸川コナン！」

「わ、私は、灰原哀……」

仁に声をかけたのは、コナンと、哀だった。

哀は、コナンの後ろに隠れる状態で、自分の名前を言った。

「私は、白野仁と申します。あの、失礼ですが、白野ユリと、白野健斗を探していただけますか？私の両親なのです。」

「つまり……迷子ってことなのね？」

警戒が解けたのだろうか？

哀は、ちよつとだけコナンの背中から離れ、言った。

「恥ずかしい話……その通りです。」

仁は顔を赤くする。

「仁！」

「あっ……お母様！お父様！」

「心配したんだよ？どうして迷子になったんだい？」

「ひと込みに押されて……そのせいで、前が見えなくなって、見失ったんです。心配掛けて、ごめんなさい……」

仁は、シユンとなって謝る。

「いいですね、あなたが無事なら……あらっ、そちらの方々は？」

「この方は、江戸川コナンさん。そしてこの方は、灰原哀さんです。」

「こんばんわ。哀さん、コナンさん。」

にこっとユリが笑う。

「こんばんわ。」

「こんばんわ・・・」

二人が挨拶をした時だった。

「こらっ、コナン君！哀ちゃん！」

女の声が、響いた。

「あつ、白野財閥の！」

「あつ・・・これはこれは、鈴木財閥のご令嬢。今日はパーティーに来ていただき、光栄ですわ。」

そこに来たのは、小五郎、蘭、園子、服部、和葉、歩美、光彦、元太だった。

「こんばんわ、白野財閥のお坊ちゃん。」

「こんばんわ、鈴木財閥のご令嬢。」

仁は、頭を下げる。

「仁、そろそろパーティーが始まりますわ。早くお行きませう。あたくしが、仁の後ろにつきますわ。」

「ごめんなさい、お母様。ありがとうございました、コナンさん、哀さん。」

仁はにこっと笑いながらお礼を言うと、健斗の後ろを歩いていった。

一人の女が、じっとみていることにも、気がつかずに・・・

「さあ、食べてくださいな。」

仁達と、コナン達は、一緒のテーブルで食べることになった。

仁は、コナンの隣にいる。

「さすがだわ。ここは、白野財閥のお得意様なんですか？」

「はい。ここはあたくし共のところですね。」

その時、アナウンスが流れた。

『白野仁さん。白野仁さん。お会いしたいという方がいらっしやるので、至急、ホールまで来てください。』

「あっ・・・行かなくてはなりませんね。たぶん、あの二人じゃないでしょうか？ほらっ、私を助けてくださった、あのお二人のことです。」

「あっ、あの方たちですね。」

「えっ・・・どんな人？」

コナンは質問する。

「一人目は、ニット帽をかぶってらっしやる方で、男の方です。もう一人は、眼鏡をかけていて、金髪で、髪の毛の短い女の方でした。」

「ジヨディ先生じゃない？ほらっ、特徴もあってるし！会ってきたなよ、仁君。」

園子は、明るく言っ。

「はい！お礼も言いたいですし。行ってきます、お母様。」

「いってらっしやい、仁。」

仁は、タタッと走っていった。

コナンと哀は、じっと、仁の後姿を見ていた。

「えっと、すみませーん！白野仁です！私にお会いしたいという方はどこですかー？」

仁は、声を張り上げて、探す。

「後ろよ。」

女の声が、ホールに響く。

「えっ・・・？」

仁が言った瞬間。仁の口は、ハンカチで塞がれた。

「んっ！んっ！んっ！」

仁は暴れるが、到底、大人の女の力には敵わない。

「んっ・・・」

クロロホルムがハンカチにしみ込んでいたらしい。

仁の眼がトロンとしてきた。

そして、目が完全に閉じられた。

「ウフフッ。見つけた・・・」

女の声が、ホールに響いた・・・

「ねえ。遅すぎない？仁君。」

蘭が言う。

確かに、仁が遅い。

「おかしいですわね。そんなに長くなることはないのですけれど。たぶん、そのジヨディさんという方と、その連れと一緒に、遊びに行ったらっしゃるのかも知れせんわ。」

「でも、念のために、ホールを見てきます。」

「蘭が行くなら、私も！」

園子と、蘭が立ち上がり、ホールへと走っていった。

「あっ！これ・・・仁君の靴じゃない？！」

蘭が思わず叫ぶ。

「本当だわ！確かに、‘仁’って書いてある！」

『誘拐されたんだわ！』

二人の考えが一致した瞬間、皆に伝えに、上へと上がった。

手遅れになる前に・・・と願いつつ・・・

「ん……？こゝ、こゝは……？」

仁は、目を覚ました。

見慣れぬ場所なため、何分間か、どこにいるのかが分からなかった。

「ここは・・・倉庫、ですか・・・？」

そう。ここは倉庫だったのだ。

身動きはできる状態だった。

ガタンッ！

倉庫の扉が開いた。

「あら、お目覚め？」

「あ、あなたは誰ですか?!」

仁は、驚きの目を女に向けた。

「まさか、シエリーと同じようにして、逃げだすなんてね。あなたのことだから、思いつかなかったわ。」

「誰だと聞いてるんです、教えてください！」

「あら、覚えてないの？ちょっと前に逃げだしたばかりなのに。」

「逃げ出した・・・？」

覚えのない言葉を言われ、仁は戸惑う。

「私は、何も知りません。人違いです。」

きっぱりと否定するのだが、その女は認めない。

「覚えてないなら、教えてあげる。・・・私は暗号名^{コードネーム}、ベルモット。
あなたは、暗号名^{コードネーム}、ジン。分かった？」

「私は、組織みたいなものには入った記憶はありません。」

「記憶喪失、ね。厄介だわ・・・」

ベルモットは、ふうつと息を吐いた。

「どうやったなら思い出すかしら。人でも殺させようかしらね。」

ビクッ！

仁の体が大きく震えた。

人を殺すという言葉に、反応したのだ。

「ウフフツ。私と初めて会った時も、人を殺していたものね。殺してみると、思いだすかも。」

不敵な笑みを、ベルモットは顔に浮かばせる。

仁は、震えていた。

「いやっ……いやです！私はやりません！」

「記憶喪失なつてまで、反発する？普通。自分が入っていた組織に。まあ、それぐらいないと、裏切れないものね。」

そう言って、仁に銃を持たせようとする。

「いやです!」

仁は、拒絶した。

「ダメよ、思いだしてくれなきゃ困るわ。」

ベルモットは、銃を仁の手に近付けていく。

「やめてください!私はやりません!」

仁が何度叫ぼうと、ベルモットは銃を近づけていく。

そして、とうとうコーナーまで追い詰められてしまった。

「……ッ!死んでも持ちません!銃だけは!」

「そう……どうせ、裏切り者には、死、あるのみ。いつか死ぬわ。」

今のうちに殺してあげる……」

そう言って、仁に渡そうとしていた銃を、仁の頭へと付けた。

「……ッ！（私、このまま死んじゃうんですね。でも、裏切り者
ってどう言うことでしょうか？暗号名^{コードネーム}、ジン……どこかで聞き覚え
があるのに……思い出せません。何も分からずに、死んじゃうん
ですね。せめて、記憶だけでも戻したかった……）」

仁の目に、涙がたまる。

そして、1筋の涙が、頬を伝った。

一粒一粒、きれいに仁の頬を流れていく。

「……それは、死ぬのが怖いから泣いているの？」

ベルモットの質問に、仁は、こう答えた。

「違い……ます。記憶を戻せないことが悲しかったんです……
何も分かってないですから……あなたは、昔から私を知っていた
ようでした。でも、私は今、初めて会いました……いえ、会った

ようにしか思えませんでした。だから、最後ぐらい記憶が戻れば・・・
・そう思ってたなら、泣いてたんです・・・」

「そう・・・あの世でも、思いだせるわ・・・」

「そう・・・ですか・・・」

仁は、スッと目を閉じた。

いつ殺してもかまわない、と言っているように。

その時だった。

ガタンッ！！

倉庫の扉が、勢いよく開いた。

「ベルモット！そこまでよー！」

「なっ？！」

ベルモットが、驚きの声を上げる。

「あっ……！」

「大丈夫？仁君！」

「はっ、はい！」

仁は、返事をする。しかし、驚きのあまり、声がひっくり返った。

「チッ！今日はここまでにしとくわ。でもね、ジン！裏切り者には、死！しか選択肢はないわ！平和に生きれると、思わないで！」

ベルモットはそのまま、倉庫の窓を破り、外へと飛び出した。

「大丈夫か？」

「は、はい。えっと、お名前……」

仁は、二人の名前を聞くことにした。

「私は……」

二人で何やらしゃべっているのが分かる。

「？」

よく分からない。そう仁が思った時だ。

「私は、ジョディ・サンテミリオンよ。」

「俺は、諸星大。」

二人とも、偽名を使っていくようだ。

「サンテミリオン……お酒、ですか。」

仁は、何か分かったような顔をしていた。だが、すぐに顔を戻す。

「ねえ、仁……何か、思いだした？ベルモットが言ったことでも

いいから。」

「えっと……私の暗号名^{コードネーム}ってというのが、‘ジン’だって言っていました。組織の裏切り者だとか、逃げだしたとか、そんなことを言っていました。」

『……！』

二人は、まさかと思った。

仁 ジン

だと思っていたのだが、本当は。

仁 ジン

かもしれない。

「仁。君は何か思いましたか？」

「思います……」

仁は、少し考えてみた。

「（お酒……「ジン」というのも「ベルモット」というのも、お酒の名前……ここまではさっき考え付いたところですよ……私が入っていたとされる組織は、皆、お酒の暗号名コードネームで呼ばれている……そう考えれば、つじつまがあうかもしれませんが……）」

「仁？」

「あっ、はい。えっと、これは私の予測にすぎないんですけど……」

「いいわよ、それで。」

「えっと、私が入っていたとされる組織は、皆、お酒の暗号名コードネームで呼ばれてると思うんです。」

「どっしって？」

赤井も、ジヨディも、組織のことは知っている。

しかし、予測にすぎないとしても、当たればすごいだろう。

それで、なぜ、そうだと思ったのかを、答えさせようとしている。

「ベルモット、ジン・・・この二つは、すべてお酒の名前です。二人がお酒の名前なのに、ほかの仲間が違うものの名前だと、おかしいじゃありませんか。」

「その通りだな。他には？」

赤井は、さらに問う。

「すみません、それ以上は情報が少なすぎて・・・」

「分かった。だが、さっき、ジヨデイが名前を名乗ったな？その時、表情が変わったのは？」

確かに、ジヨデイが偽名である名前を名乗ったとき、仁は表情を変えた。

「それは、サンテミリオン、が、お酒の名前だったからです。お酒

の名前でしたから、その時、今の予測にたどりついたんです。」

「ほう。」

赤井が感心していると、ジョディが赤井の肩をトントンと叩いた。

そして、小声で何やらしゃべっている。

「仁。一度、記憶を戻せるかもしれないところに行ってみるか？」

「は??？」

「だ、大丈夫？」

「は、はい……」

急に言われて、本日二度目の変な声。

だが、記憶を戻せるかもしれない……

そしたら、ベルモットのことも、何か思い出すかも知れない。

「行ってみたいです。」

仁は、答えた。

「よし。じゃあ行こう。ジヨディ。この子の知り合いに電話を。」

「分かったわ。」

ジヨディは、携帯を取り出し、電話をし始めた。

「俺達は先に行こう。」

「はい。」

天使の微笑みで、赤井に笑いかける。

そしてゆっくりと、日が昇ってきた・・・

FILE 5 パーティーでの事件（後書き）

仁「何か今日は何が何だが分からない1日でした。」

赤井「ベルモットが知っているとなれば、組織も・・・」

ジヨデイ「分からないわ。シェリーを殺そうとしている割には、組織は未だに探しているもの。」

赤井「どっちの味方だろうな、あいつは。」

ジヨデイ「さあ？」

仁「何ででしょう・・・あとがきでは、この二人が主人公のような・・・」

赤井「え？」

ジヨデイ「あつ、あははははは。」

仁「それ、無理矢理笑ってませんか？（絶対零度の怒り&絶対零度の微笑み）

赤井「・・・」

ジヨデイ「し、シュウ、何顔背けてるのよ・・・」

赤井「いや、まともに食らったら顔が引きつる。」

仁「何かおっしやいました？（絶対零度の微笑み）」

赤井「いえ、何も・・・」

仁「まあとりあえず。次回も読んでくださいね。もしかしたら・・・あ、もしかしたらですよ？作者が書かなかつたら、作者のせいです。もしかしたら、次回、私の記憶が戻るかもです！」

ジヨデイ「絶対見てね！」

赤井「せいぜいがんばれ。俺は知らん。」

ジヨデイ「次回も！」

仁「お楽しみに〜！」

赤井「よくやるな・・・」

FILE 6 記憶回復

仁と赤井が言ったところは、精神科だ。

そこで、カウンセリングを受けることにしている。

もしかしたら、精神的ショックを受けて、フラついているときに、車にひかれたのかもしれない。赤井とジョディは、そう考えたのだ。

「しぎげんよう。」

「しぎげんよう。」

仁が言った言葉を、主治医は繰り返して言ってる。

主治医は、「しぎげんよう」の意味を知っていた。

「じゃあ、そこに座って。何考えずに、楽しんでいて。」

「はい……」

仁は、スッと目を閉じた。

「君の名は？」

「俺は・・・暗号名^{コードネーム}、ジン・・・本名は、思い出せない・・・」

「自分が倒れていた場所まで、何をしていたんだい？」

「俺、は・・・『組織』を裏切つて・・・でも、組織に感づかれて・・・ガス室に閉じ込められた・・・逃げ出す際・・・APT^{アポトキシン}X4869を飲んで、ダストシユートから、外へ逃げだした・・・でも、だんだん毒が効いてきて・・・フラついたときに、車に・・・」

「ありがとう、もういいよ。」

「・・・！」

仁は、目を開けた。

しかし、いつもとは様子が違う。

「あ、ありがとうございます、先生。ごきげんよう。」

「お大事にね。ごきげんよう。」

主治医は、にこっと笑うと、手を振った。

そして、仁と赤井は、部屋から出ていった。

「ジョディ、今帰ったぞ。」

「ありがとう、シユウ。で、どうだった？」

「それは……本人から話してもらおうとしよう。」

赤井は、仁を横目で見た。

「……」

仁は、黙って下を向いていた。

そして、ゆっくりと口を開いた。

「記憶は……戻った……」

「戻ったのね？じゃあ名前は？」

「……暗号名^{コードネーム}ジン。」

「！…！どう言うこと？ シュウ！体が幼児化するなんて、ありえないわー！」

ジヨディは声を上げる。

「アボトキシン
A P T X 4 8 6 9」

「それで、体が縮んだらしい。」

「そんな・・・」

ジヨディは、未だに信じられないようだ。

「シエリーと同じように、脱出した。同じ道だと気づいたのは、脱出してからのこと。」

「でも、どうして組織を裏切ったのよ？」

「・・・」

ジンは、うつむいてしまった。

しかし、言う決心がついたのだろうか？

顔をあげて、口を開いた。

「組織が、俺の家族を殺したと分かったからだ。俺は、事故だと思っただ。事故以外、考えられなかった。でも、それは違った。俺がそのことに気が付いたのは、5日前。‘あの方’の部屋に行って、調べ物をしていた時だ。自分が探しているものは取れたが、他の物が、一気に落ちてきた。それは、組織が手がけた事件のこと。それを気まぐれで呼んでいると、俺の家族の名前があった。殺し方も、巧妙に作戦を練り、事故に見せかけるやり方だった。それをやったのは・・・ベルモットだ。さすがに俺もキレたよ。だが、‘あの方’がいる限り、俺の勝ち目はねえ。なら、裏切った方がいいと思っただ。だが、失敗。とっ捕まったさ。それで、シエリーと同じように、脱出したんだ。」

ジンは、静かに語る。

だが、その目には炎が燃えているようだった。

「だから、組織を倒すのに・・・協力する。」

ジンは、静かに言った。

「……信じるわ。あなたを。」

「……！本当に……信じる、のか……？」

ジンは、信じられないらしい。

「当たり前よ。体が幼児化している状態で、嘘をついても、意味ないわ。騙しているかもしれないけど、信じてみる。」

「俺もだ。」

赤井も同意した。

ジンは、小さな声で、こつ吐いた。

「……ありがとう……」

その言葉を、ジヨディと赤井は聞き逃さなかった。

そして、FBIに、新たな仲間ができた。

元組織で、組織のことをよく知っている、心強い仲間が・・・

FILE 6 記憶回復（後書き）

ジヨデイ「さて、仲間も加わったことだし、また探さないかね、アジト。」

ジン「場所、だいぶ遠い。だから、とりあえず、準備をしてから行ったほうがいいと思う。」

赤井「という助言があったからだ。アジトが見つかり次第、踏み込むぞ。」

ジン「・・・さて、俺はそろそろ。」

ジヨデイ「捕まらないようにね！」

ジン「んな、へマ、あのときしかしねえ・・・」

赤井「だな。」

ジヨデイ「じゃあ、また読んでください！さよならっ。」

FILE7 標的

ジンが仲間に入って、一週間が経った。

相変わらず、情報は入ってこない。

ジンから聞けばいいのだが、ジンは、まだ組織の名残なごりがあるのか、話さない。

話そうにも、どこかで聞いていると思うと、怖いのだという。

それほど、組織は怖いものだということが、改めて分かった。

「・・・ねえ、ジン。まだ、話せない？」

「・・・」

ジンは、下を向いたまま、黙ってしまった。

その時だ。

ジンの目が、見開かれた。

「どうした？」

「みんなが・・・」

『え？』

聞こえにくかったのだろう。

もう一度言ってくれと言っているように、赤井、ジヨデイ、ジエイムズは、ジンに近寄る。

「みんなが・・・この病院にいる！！」

『！！！』

ジンの言葉に、皆はあたりをキョロキョロ見渡す。

しかし、それらしき人は見当たらない。

「どこらへんか、分かる？」

「・・・」

震えながら、顔を横に振る。

「・・・分かった。少し休め。疲れてきただろうからな。」

コクンとうなずき、病室に向かおうとした。

しかし、ジンは前を見た瞬間、固まってしまった。

それは、目の前に・・・

「べ、ベルモット・・・」

そう、ベルモットがいたからだ！

「記憶が戻ったようね、ジン・・・」

不敵な笑みを、顔に浮かべる。

「裏切りものに、幸せなんてないって、いやというほど分かってい
るでしょう？あの方が、ラストチャンスをくれたわ。今日の0時ま
でに、アジトに来なさい。そしたら、裏切ったことは音沙汰なし、
ですって。」

「……!!」

「私は、それを伝えに来ただけ。じゃあね。」

ベルモットは、ジンをチラッと見て笑うと、そのまま姿を消した。

「ジン！」

ジヨディたちが駆け寄る。

ジンの体は、震えていた。

「大丈夫よ。もう居ないんだから。とりあえず、休みなさい。見張

りは、2、3人つけておくから。」

コクンとうなずくジンは、とても小さかった。

いつもは、すごくでかく見えていたのに。

今では、とても小さく感じた。

小学生の体だからではない。

体を丸めて、その場に蹲すくまっていたからだ。

見かねたジヨディは、

「シユウ。ジンを部屋に送ってあげて。まだいるかもしれないから。見張りも、あなたに頼むわ。安心だしね。」

「分かった。行くぞ、ジン。」

赤井は、スツとジンの目の前に立った。

「・・・」

ブルブル震えているジンを少しの間みていると、赤井は、ジンを抱き上げた。

「へっ?!」

わけのわからない声を出してしまったジンは、少し顔を赤らめた。

二十歳を過ぎた大人が、子供の姿になったとしても。

精神はそのままなのだから、恥ずかしいのは当たり前。

しかし、今の体では到底かなうはずもなく。

抱きかかえられたまま、部屋に向かっていくことになってしまった。

ジンは、黙って赤井を見つめている。

その視線に気づいた赤井は、ジンを見た。

「どうした？俺の顔に、何かついてるか？」

「えっ？い、いや、何も・・・」

目をそらして、下を向く。

ジンは、少し眠くなってきたようだ。

目をこすっている。

それもそのはず。

ジンは、昨日、一睡もしてないのだから。

本当は、ジョディたちに寝ると言われていたのだが、どうしても、ジョディたちの話に、加わってしまうのだ。

そのため、一睡もできず。

眠いのは、そのせいだ。

「寝てもいいぞ。」

一言で言う赤井。

ジンは静かにうなずくと、スーツと眠りについた。

赤井は、部屋に着くと、ベッドに静かにジンを置き、椅子に座った。

「・・・組織の狙いが、シェリーから、ジンへと変わったか・・・
？」

独り言のように、静かに吐く赤井の声は、静かな病室に響いた・・・

FILE7 標的(後書き)

すみません、今日はお休みします・・・

とりあえず、評価・感想などを宜しくお願いしますw

FILE 8 本部へ

現在は、20時。

後、2時間。

「ジーン……どうするの?」

「……」

ジンは、黙ってベッドの上に蹲まぐるばかりだ。

「……言いくいか?」

赤井の言葉に、うなづくジン。

「じゃあ、聞く。組織に戻る気は?」

首を横に振る。

「……ないんだな？」

「クンとうなずく。」

「……分かった。じゃあ、行かなくていい。だろう？」

静かに、うなずく。

「決まれば、動かないとな。とりあえず、本部に置けば大丈夫だろう。」

「そうね……シユウ。あなたにお願いできる？」

「ああ。」

「それでいい？ジン。」

「……ああ。」

小さく言っ。

少し、何かを考えている様子だった。

「どっした？」

ジェームズが、心配したように聞く。

「いや……何も。」

ジンはそう言ったあと、スリッドから降りる。

「ちょっと、どこ行くの？！」

ジョディが、慌ててジンのところに駆け寄る。

「……ちょっと風に当たりに行くだけだ。」

ジンはそう言い、部屋から出ていった。

ジンは、病院の玄関にいた。

「これ以上、FBIと一緒にいるわけにはいかねえ……」

「どうやら、逃げるつもりらしい。」

しかし、躊躇ためらっているようだ。

何度か、後ろを見る。

しかし、決心したように、病院を出ようとする。

すると、後ろで気配がした。

驚いて、後ろを振り返ると、そこには……

「赤井……秀一……」

赤井が立っていた。

「ここで、風に当たるのか？屋上の場所ぐらい、知ってるだろう？」

「・・・」

黙って、赤井を見る。

「・・・屋上だと、狙われやすいと思ったから。」

「なら、ここも一緒だ。待ち伏せされていたら、元も子もない。」

「まだ0時にはなってる。監視しているだけのはずだ。」

「屋上に行っても、狙われないだろう？」

「0時になったら、監視人が銃を撃つはずだ。屋上なんかいたら、死にしまう。ここなら、まだ屋上よりは安全だ。」

ああ言えばこいつ言つ。

ずっとこれの繰り返しだった。

そして赤井が、言い放った。

「『これ以上、FBIと一緒にいるわけにはいかねえ……』そう
言ったのは、誰だ？」

「！！き、聞いてたのか？」

「ああ……」

不敵な笑みを浮かべる赤井。

「くっ……」

顔を顰めるジン。

一気に、赤井が上へと回った。

「来てもらおう。逃げられたらかなわん。」

ジンの手を持つとうとする赤井に、ジンは抵抗する。

「嫌だな。俺がいたら、お前たちにとっても邪魔になるはずだ。そんなところに、いてなんかいられない。」

きっぱりと言い放つジンに、赤井はまた不敵な笑みを浮かべる。

「誰が邪魔になるって言った？」

「いつか、邪魔になるさ。」

「お前は、たつぷり『利用』させてもらうからな……逃げられちゃ困るんだ、『こつち』がな。」

グッとジンの手を持つ。

「……ッ!」

握られた手のほうに、痛みが走る。

あまりの痛さに、手を押さえてしまった。

それを見た赤井は、フツと笑うと、力を抜き、ジンの手を離した。

ジンは、キツと赤井を睨む。

赤井は、またフツと笑った。

「……もうすぐ0時だ。本部に行くぞ。」

「……!!」

バツと赤井から身を離す。

「……死にたいのか？」

「……」

ジンは、静かに首を横に振る。

「なら早く行くぞ。」

今度は優しく手を握る。

ジンは、そんな赤井をジッと見ていた。

もうすぐ0時。

ジンは、逃げきることができるのだろうか……？

FILE 8 本部へ（後書き）

題名、おかしいかと思いますが、お許しください。

ご感想、待ってますw

FILE 9 これから 組織side

現在の時刻。

23時59分。

ここは、組織のアジトだ。

薄暗い部屋で、一人の女性が、時計を見ていた。

そして、カウントを始める。

「5・・・4・・・3・・・2・・・1・・・0。」

カチッ。

0時になった。

カウントをしていた女性、ベルモットは、不敵な笑みを浮かべた。

「・・・結局来なかったのね、ジン・・・あなたなら、絶対に戻ってくると思っていたのに・・・」

フツと笑うベルモットの元に、3人の男女が入ってきた。

「結局来なかったのかい？ジンは。」

「キャンティ・・・コルン、ウオツカ・・・」

そこに来たのは、キャンティ、コルン、ウオツカだった。

「ええ、来なかったわ・・・ジンなら、絶対に来ると思っていたけど・・・警備が厳重で、逃げられないのかしら？」

ベルモットの言葉に、皆は賛成した。

FBIの警備が厳重ならば、そこから逃れることはできない。

「・・・後日、ジン宛に手紙を出しましょう。それで呼び出せば、ジンもFBIに気付かれずに、ここに来ることができるもの・・・私は、あの方にそのことを伝えてくるわ・・・」

「頼んだよ、ベルモット。」

「ええ、分かっているわ……」

ベルモットは、スクツと立ち上がり、部屋を後にした。

「……なんか、すごいことになっちまったね。」

「そうっすね。兄貴が裏切った時は、すごい驚きやした。」

3人は、これからどうするかを考え始めた。

「まず、どっにするっ？」

「ジン、連れてくる……」

「それは絶対だね。でも、問題はその次だよ。」

「……その時はその時じゃないですかい？兄貴がどう言っかなんて、分かりやせんし。」

ウォッカの言うことは正論だ。

ジンは、一体何を考えているのか、分からない。

つまり、何を言うかが、分からないのだ。

「・・・あたい達は、あの方からの命令に従うしかないみたいだね。とりあえず、部屋に戻るとしよう。じゃあ。」

「そうつすね。」

3人は、自分たちの部屋へと戻っていった。

まだ見えぬ未来。

何が起こるか分からない。

組織は、どう言う行動に出るのか？

FILE9 これから 組織side(後書き)

どうも、martiniです！

やっと筆記中小説がなくなった！

だいぶたまってたので、すごい嬉しいです！

つつか、ためていた私がバカなんです(笑)

感想や意見、待ってます

ここは、FBI本部。

ちょうど今、0時になった。

ジンは、部屋にある、ベッドの上で震えながら蹲まぐっていた。

部屋にいるのは、赤井ただ一人。

赤井は、そんな様子のジンを、ジッと見つめていた。

1分・・・2分・・・

いくら経っても、組織の仲間らしき人は来ない。

ジンも、安心してきたのだろう。

水を飲みに行くと言って、部屋を出ようとする。

しかし、赤井は警戒を解いていないのだろうか。

グッとジンの手をつかむ。

その行動に驚いたジンは、ビクッと体を震わせた。

「まだ出ないほうがいい。朝になったら外に出よう。外で待ち伏せしているかもしれない。」

赤井の言葉を聞き、ジンはベッドに戻る。

「・・・なあ。」

「何だ？」

ジンは、それっきり黙ってしまふ。

どうしたのかと聞くが、話しくいらしい。

そして、数分が経過した後、口を開いた。

「お前なら・・・どうする？」

「え？」

「お前なら、こんな状況の時、どうする？」

「・・・」

「何も分からねえんだ・・・いつもみたいに頭が働かなくて・・・
何でこの場にいるんだろって・・・どうしたらいいのか、分から
ねえんだ・・・」

ジンの声は、とても弱弱しかった。

それほど、思い詰めているのだろうか？

「お前なら・・・どうする？」

ジンの問いに、赤井は答えられなかった。

どう答えたらいいのか、分からないからだ。

「・・・俺は、組織に戻ったほうがいいのか・・・？」

「!」

ジンの言葉に、赤井は顔を険しくした。

「時間が過ぎても・・・ちょっとなら許してくれるんじゃないかな・

」

「ジン・・・」

どうやってやったらいいのか、赤井には分からなかった。

「・・・しばらく一人にしてくれないか・・・？」

「・・・分かった。」

赤井は、静かに部屋を出ていった。

ジンは、赤井が出て言ったあと、考えた。

これから、どうすればよいのだろう。

これからずっと、組織に怯えながら生きていかなばならないのか。

それしか、考えることができなかった。

「シュウ、どうだった？ジンの様子・・・」

ジヨディが、部屋から出てきた赤井に駆け寄る。

「・・・大分、精神的に疲れてるようだ。当たり前だな。いつ来るか分からない相手だ。休んでいる暇はない。今頃、これから先のことを考えているさ・・・」

「だが、これからどうする？必ずと言っていい、組織はジンを捕まえに来るぞ。」

「それが問題ですね・・・」

FBIでも、これから先のことを考えるほか、作戦はなかった・・・

これから、どうなるのか？

ジンは、どうするのか？

真相は、まだ闇の中・・・

FILE10 これから FBI&ジンスide (後書き)

筆記中小説、やっとなくなりました！

なぜか、この話を書くとき、いつも筆記中小説がたまっていく・・・

不思議ですね。(スランプなだけだろ！)

とりあえず、感想や意見、待ってまーす。

FILE 11 無情な手紙

次の日。

光が、部屋の中へと入ってきた。

ジンは、ゆっくりと体を起こす。

どうやら昨日、あのまま寝てしまっていたようだ。

ふと掛け布団を見ると、そこに手紙らしき紙が置いてあった。

差出人は、不明である。

その手紙は、真っ黒だった。

その真っ黒な色が、組織のことを思い出させる。

頭を横に数回振った。

どうか、組織じゃありませんように・・・

そう願いながら。

しかし、その願いは、無情にも崩れ去っていった。

『お目覚めはいかが？ジン。』

昨日、あなたはアジトに来なかったわね？

FBIの警備が、嚴重なのかしら？

私にはよく分からないけど、これが本当のlast chance・・・

ラストチャンス

ここに書いてある場所へと来なさい。

そうしろと、あの方がおっしゃったわ。

来るか来ないかを選ぶのは、あなた次第よ・・・

PS . このことはFBIには言わないこと。言ったら後悔することになるわよ」

その手紙の下のほうには、こう書いてあった。

『私達が初めて会った場所。』

シンプルな言葉だった。

その下に書いてあった、差出人の名前を見て、予想はしていた人物だが、ジンは見事に固まってしまった。

ヘルモット
vermouth

一瞬、FBIに言おうかと思ったが、それも許されないことを手紙に書いてあったことを思い出した。

つまり、たった一人で悩まなくてはならないのだ。

流石にジンも、どうしたらいいのかわからなくなった。

ただでさえ精神的に参っているという時に、こんな手紙が来るなんて。

思ってもしなかった出来事に、ジンは混乱した。

すると、ガチャツという音とともに、赤井が入ってきた。

ジンは、慌てて手紙をベッドへと隠す。

そして、ポーカーフェイスを保ち、

「……おはよう。」

と、挨拶を言った。

「おはよう。」

赤井は、疑っている様子もなく、普通に挨拶をしてくる。

少し、ホッとした。

しかし、相手が相手である。

「・・・何かあったのか？」

「え？」

即効、疑われてしまった。

いつも通りの対応をしているつもりだが、やはり少し気配的に違うようだ。

「いや、別に何も・・・」

「本当か？」

「・・・」

そう何度も繰り返し返し聞かれたら、どう答えたらいいのかわからなくなったらしい。

黙りこくってしまおう。

「……まあいい。とりあえず、朝食だ。」

あまり深く追求されなくて、良かったと、ジンは思った。

赤井は、ジッとジンを見ていた。

何か隠していると、確信したようだ。

「（ジン……何か隠しているな……何を隠しているか、探るか・
……）」

少しずつ、探っていくことに決めた赤井は、ジンとともに朝食を食べ始めた。

ジンのほうは、赤井にばれないように警戒している。

赤井のほうは、隠していることを探り出そうとしている。

ぶつかり合いそうな感じだ。

とりあえず、今この時だけが、平和だと感じられる時間だった……

FILE 11 無情な手紙(後書き)

どうも、martiniです！

現在、3時52分でございます。

‘呪いの宴’を投稿した時は、2時52分・・・だったと思います。

(えっ！)

もちろん、朝ですよ。

なぜか、52分が多いです・・・

とりあえず、評価や感想、意見などを待ってますう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1245f/>

逃亡者

2010年10月23日04時25分発行